看護学におけるルーブリックの作成過程と導入後の効果に関する文献検討
－沐浴演習のルーブリック作成に向けて－

堺香奈子、前森桃子、坂本保子、藤邉祐子

要旨

本研究は、沐浴演習のルーブリック作成に向けて、看護学におけるルーブリックの作成過程と導入後の効果に関する国内の文献から原著論文 16 件を対象に文献検討を行った。その結果、「ルーブリック作成・開発」３件、「ルーブリック活用の実態」５件、「ルーブリック導入後の効果」８件の３つの項目に分けられた。ルーブリックは、学生に達成してほしい課題や目標が端的に可視化できるという利点がある一方､具体的な評価の視点を伝えきれないという課題も挙げられた。効果的なルーブリックの活用には、教員から学生へのフィードバックの機会を持ち継続的に働きかけていくことや、デモンストレーションで留意点を伝えていくなど、ルーブリックを補完する仕組みが必要であることが示唆された。

キーワード：ルーブリック、看護学、沐浴演習

Ⅰ．緒言

我が国の大学教育では、2011 年４月に大学設置基準（大学設置基準、2011）が改定され、卒業の認定のみならず通常の授業における成績評価基準等を明示する必要性が述べられている。また、大学設定基準の改定に伴って、翌年 2012 年３月に学校教育法施行規則（学校教育法、2012）が改定され、通常の学修成果に係わる評価基準の明示化と公表が義務づけられている。このことから、学習者の達成度を示す基準となるルーブリック評価が求められることになった（石垣、2016）。ルーブリックはテスト法では判定する事ができない、思考力・判断力などの質的な評価を行うための評価指針として必要であり、レポートや論文など、学生の示したパフォーマンスを評価する場合に有効である（沖、2004）。

2010 年の看護教員養成講習のガイドライン（厚生労働省、2010）では、実習評価について「自ら学ぶ意欲や思考力、判断力、表現力などの能力も含めた学習の到達度を評価していくことが重要」であり、「自己学習力の向上」につながるものとして、ルーブリック評価が必要だと述べている。厚生労働省の 2011 年の看護教育に関する検討会（厚生労働省、2011）では、看護師に求められる実践能力として、①ヒューマンケアの基本的な能力、②根拠に基づき、看護を計画的に実践する能力、③健康の保持増進、疾病の予防、健康の回復にかかわる実践能力、④ケア環境とチーム体制を理解し活用する能力、⑤専門職者として研鑽し続ける基本能力、の５つが挙げられている。このような看護の実践能力は、客観テストでは測ることができない。そこで、これらの実践能力を総合的にとらえるために、ルーブリックという評価方法が活用されている（細尾、2021）。学生の主体性や思考力・判断力を評価するために、ルーブリックを用いた評価は有

用であると考える。

そこで今回、母性看護援助論における新生児の沐浴演習において、ルーブリックを作成し導入することにした。新生児の沐浴は、清潔・衣生活援助の他に、環境調整、排泄援助、呼吸･循環を整える技術、感染予防、安全管理、安楽の確保を統合して行う複雑な技術であり、対象が生後間もない新生児であることから、学生の心理的負担が大きい。ルーブリックを用いて沐浴演習の評価表を作成し、沐浴演習前後で学生と教員が一緒に評価を行うことで、技術の習得を促し、さらに実習では学生が自分の達成度を確認しながら学ぶことが考えられる。今回、看護学実習におけるルーブリックの作成過程と導入後の効果に関する文献検討を行うことで、沐浴演習におけるルーブリックの作成に向けての参考資料とする。

Ⅱ．研究方法

１．研究デザイン

質的記述的研究による文献検討

２．対象文献の検索方法

2018 年から 2023 年 1 月までの 5 年間に発表された原著論文を検索対象とした。医学中央雑誌 WEB 版を用いて、「ルーブリック」「看護」で検索を行った結果 47 件の文献が得られた。さらに、メディカルオンラインを用いて､「ルーブリック」で検索を行ったところ 50 件の文献が得られた。タイトルおよび抄録から研究目的の内容が読み取れる原著論文 16 件を分析対象とした。

３．分析方法

得られた文献を詳細に読み、実習におけるルーブリックの作成過程と課題について項目ごとに研究者間で検討した。

Ⅲ．結果

研究内容の類似性により分析した結果、「ルーブリック作成・開発」３件、「ルーブリック活用の実態」５件、「ルーブリック導入後の効果」８件の３つに分類することができた。それぞれの論文のタイトル、著者名、目的、結果を表１に示した。次に項目ごとに述べる。

１．ルーブリック作成・開発

大井ら（2018）は、成人看護論実習のルーブリック評価表の作成にあたり、学生が理解して活用できるものとするために、実習課題に基づく《評価尺度》の基軸の明確化と、実習の場において想定される具体的な学習活動を反映した《評価基準》の作成を行った。ルーブリック評価表の作成では、沖（2014）の日本の高等教育にルーブリックを活用する際の手順、を参考に作成手順を確認していた。次に、ルーブリックの構成について、要素１《課題》、要素２《評価尺度》、要素３《評価観点》､要素４《評価基準》の４要素から作成されること(Dannelle,Antonia,2013/2014)を確認していた。評価尺度を検討する過程において、教員の評価過程の偏りを避けるため、実習を担当する教員間での話し合いを通して各評価尺度の具体的イメージを共有することで、相互の実習評価に関する価値観に気づき、教員全体で一致に向かう道筋を辿り、評価過程の偏りを避ける尺度として合意に至った、と述べている。また、評価基準の作成では、教員間で、学生の学修場面を一つひとつ話し合いながら確認し、評価の視点がディプロマポリシーを十分に反映した内容であることを確認していた。今後の課題として、《評価尺度》に対する、‘かなりの支援を受け

て’と‘支援を受けて’の区分が分かりにくさを挙げ、程度量を表す用語の不明瞭さを指摘し、看護実践の難易度や学生のレディネスにより支援の量と質は一定と言えないため、程度量表現の曖昧さを解消することは難しく、《評価基準》の表現と指導方法の検討が必要である、と述べている。

山田ら(2017)は、助産師学生の妊婦健康診査の実習記録10事例を対象に、日本看護協会「新卒助産師研修ガイドライン」の妊婦ケアのチェックリストから作成した評価表と、独自に開発したルーブリックを用いて、２つの大学における教員間の評価の差異を比較した。その結果、「新卒助産師研修ガイドライン」の妊婦ケアのチェックリストから作成した評価表では、同一の実習記録に対する評価の「ほとんど一致しない」の割合はA大学教員群30%とB大学教員群70%の差異を認めた。一方、独自に開発したルーブリックを用いた場合、同一の実習記録に対する評価の「ほとんど一致しない」の割合はA大学教員群10%、B大学教員群40%まで減少した。ルーブリックを用いた評価の方が、教員間の評価の一致度は向上した。

岸川ら(2019)は、Stevens and Levi(2014)を手がかりとして、ルーブリックの作成手順と意義について報告している。ルーブリックの作成では、①授業科目の振り返り、②学生の達成目標のリスト作り、③達成目標のリストのグループ化と見出し付け、④達成指針のチェック項目の検討、⑤ルーブリックの完成、といった手順で行われることを明らかにした。また、ルーブリックを使用しての評価について、評価を点数化する場合、ルーブリックでは大まかな点数としての評価はできるが、細かい点数を付けるには、難しい点がある、と述べている。

２．ルーブリック活用の実態

本田ら(2020)は、ICE-R※評価表を用いた自己学習を行うことで、自己の実践を振り返ることが意識づけられ、技術テストの後で行った教員から学生への個別のフィードバックでは、ICE-R 評価表の項目をひとつひとつ抑えながら、何ができていて何が課題であるかを共有した。(※ICE-R：試験の評価表としてのみならず、看護技術の到達目標を示した学修ガイドとしての位置づけを意味する場合は、ICR-E という用語を用いる。）授業で学生に見せるデモンストレーションで、レベルの高い教員の技術を学生が見ることによって、学生の評価基準や、基準が高く設定された技術の評価を共有し、学生が意識できていない評価の視点を伝えることで、教員と学生の評価基準を一致させていくと述べている。

長峰ら（2018）は、教員と学生の評価を一致させるところで、学生に自己評価をさせて終えるのではなく、教員自身もルーブリックの観点・基準で学生の成長・課題を把握する。そしてルーブリックによる自己評価を基にした面談において適切で具体的なフィードバックができるよう、教員が学生と関わりよく知ろうとする努力が必要である。教員が客観的な視点で自己評価の根拠について確認したり、学生自身があまり意識していない面に目を向けるような問いかけをしたりすることで、学生が自らの能力に関する新たな気づきを得る様子が見られた、と述べている。

鈴木ら(2018)は、ルーブリックの優れた活用により学生は、実習中から形成的評価を実施しながら、目標達成に向かって学ぶおもしろさや、より高い評価基準を目指すことにより、達成感を実感することができる。教員は実習前から積極的に対話することによって、学生が自己の実習目標の達成状況を意識しながら、課題に向けて行動ができているか確認すること、学生が適切な課題を設定できるように助言することが求められている。

須藤ら(2018)は、ルーブリック評価を用いることで、学生自身が自己評価の指標として用いる

到達目標として提示でき、学修目標に基づいて学生自身が自分で学びを振り返る機会になった。また学生がどのような理由〈根拠〉で評価しているか、に視点をあて、学生自身が的確に自己評価する力をどのように育てるか、学生が自分自身をどのように評価しているかを可視化することで自分を評価することに自覚をもたせることが重要である。さらに効果的で効率的でも学生にやらされ感や義務感を感じさせることなく、学生自身がやってみたい、やろうという思いを起こさせ、それが内発的動機付けとなり、達成感や充実感を実感してもらうためには、「魅力」的であることが重要である、と述べている。

鷲尾ら(2019)は、母性看護学の授業ルーブリック評価表を導入し自己評価したことにより、実際の臨地の現場を想定し、母性看護学の対象や臨地施設の指導者・教員との TPO に応じた態度、言葉遣い、コミュニケーション（挨拶、報告連絡相談、身振り・姿勢、声の大きさ、距離感、表情など）の模擬体験をするなど、本科目でのさまざまな取り組みによって、自己の対応力が向上したという学生自身の実感が得られた結果、中間より最終評価が高くなった、と述べている。

３．ルーブリック導入後の効果

ルーブリックにより学習成果が可視化されることで､学生､･教員共に形成的評価が可能になり、実習目標に対する到達度の把握がしやすくなることは、小林ら（2022)、佐山ら（2022)、為永ら（2021)、深山ら（2018)、近藤（2017)、古城ら(2013)が述べていた。

小林ら（2022）は、ルーブリック導入により、学生はできない事柄に対して改善してみたいと内発的動機づけが促進され、深い学びを促すような学習活動が展開され、評価に伴う前向きな思考や落胆の感情を抱えながらも､目指したい自己像や自らの課題解決に取り組むという能動的で、深い学びにつながるような学習活動を展開できていた、と述べている。

作山ら（2022）は、ルーブリック評価は教員の教育技法の向上、学生・指導者間のコミュニケーションツールとして双方向性を確保することによって学習が進化し教育効果が期待できる、と述べている。

深山ら（2018）は、学生がルーブリック自己評価表を活用しながら、自分の実習目標が困難な場合、グループメンバーに助けを求め、理解を深められるツールとして活用していたとし、一人で学習するのではなく、グループメンバーとともに学ぶ姿勢を持つことができ、学習活動が高まった、述べている。

近藤（2017）と甲賀ら（2016）は、これまでの評価表と変わって、ルーブリックの活用の試みに困難を感じる学生もおり、学習方法を変換することの困難さを解消するためには、活用方法をより具体的にし、ルーブリックを継続して実践する必要がある、と述べている。

前山ら（2016）は、ルーブリック評価におけるリフレクションは、実践から学びを得る力をつけ、学生自身のかけがえのない成長を確かめ自覚できる働きをしてくれる。このようなトレーニングを積むことで困難なことが多い看護師の職業的アイデンティティの形成強化へとつながる、と述べている。

Ⅳ．考察

1．ルーブリック作成・開発

ルーブリック作成において、基本的に既存のルーブリックの作成手順を元に行われており、その中で各学校のディプロマポリシーや学生の学習達成目標に合わせて、評価尺度や評価基準が設

定されていた。また、授業や実習を担当するその専門分野の教員がルーブリックの開発に携わっており、目標や評価基準を共通認識することで評価者間の評価の偏りが少なくなるような工夫がなされていた。細尾（2021）は、複数人で一緒に作成することで、目標を共通認識できるとともに、評価者間の評価基準のずれを修正できる、と述べている。本学においても、母性看護学領域の担当教員が沐浴演習のルーブリック作成・開発に携わり、学生に達成してほしい目標や指導方針を具体的な内容で共有することによって、達成目標が明確になり、評価者間で評価の偏りが少なく、教員も学生も評価がしやすい評価表のルーブリックの作成ができると考える。

２．ルーブリック活用の実態

ルーブリックは、学生に課題の意図を明確に伝えることを可能にする点と、適切なタイミングで有益なフィードバックを学生に与えるという点で、価値のある道具である（Stevens and Levi、2014）。実際に、先行研究においても、ルーブリックは課題や目標の提示にとどまらず、学生自身が意識的に学びを振り返る機会として、教員から学生へフィードバックするツールとしてさまざまな場面で活用されていた。また、学生の自己評価で終わらせるのではなく、教員と学生が対話を重ねることで、教員と学生の評価を一致させていくことの重要性が明らかになった。細尾（2021）は、ルーブリックに照らして、できたことをほめることで自信をもたせ、そのうえで、課題を解決する方法を一緒に考えることで、自己の向上にも結び付く、と述べている。そのため、ルーブリックの振り返りの際には、学生と十分に対話し、良いところを見つけて自己肯定感を高められる指導が効果的であると考える。ルーブリックの評価を行うことは、自分自身を客観的に評価し、正しく評価ができているか確認し、自分自身で気づいて修正できるようなフィードバックの工夫が必要であると考えた。母性看護学に関しては、妊産褥婦や新生児のイメージが困難なことから、苦手に感じる学生も多い。マイナスのイメージからプラスのイメージに行動を変えるため、ルーブリックを活用することで自信を持って実習に臨めるような支援につなげていきたい。

ルーブリックは課題や目標が端的に可視化できるという利点がある一方、具体的な評価の視点を伝えきれないという点もある。本田ら（2020）は、学生に見せるデモンストレーションで、レベルの高い教員の技術を学生が見ることによって、教員と学生の評価基準を一致させていく、と述べている。筆者の大学では、沐浴演習の際に教員による沐浴のデモンストレーションを行っている。教科書や技術チェックリストなど紙面上では伝えきれない留意点を学生に伝えることができるためである。実際にデモンストレーションを実演することで、学生の到達目標が具体的にイメージでき、教員と学生の評価基準を一致させることが可能となるため、ルーブリックの導入後もデモンストレーションの継続が重要であることが示唆された。

３．ルーブリック導入後の効果

ルーブリックを導入することにより学習効果が可視化され、公平性、客観性、平等性があり、教員と学生の共通した評価を行う効果があることが分かった。

学生にはルーブリックについての目的や成果を詳しく説明し、十分に納得し理解して活用できるように、働きかけていく必要がある。

新生児の沐浴は高度な技術であり、学生には困惑や不安の感情が見られることがある。寺嶋ら（2006）は、評価とは教員から与えられる成績であると解釈されており、自己評価を行うだけでなく、評価視点の内容を考えることの経験のない学生にとって、学習に対する考え方の変換をし

なければならない、と述べている。ルーブリックを活用することで、自信のない技術も自らどうすれば克服できるか考え、課題解決に向けて前向きに取り組む姿勢が期待される。また、自己評価が低い学生に対しては、できているところを明確にし、客観的に自己評価できる力を養えることが予測される。

ルーブリック評価表の使用頻度の高い学生は「グループメンバーとのコミュニケーションがとりやすくなった」と感じていた（作山、2022）。現在、本学では沐浴演習後に試作のルーブリックを学生が行っている。その中で、学生同士で目標を共有しあい到達度を確認している。同じ目標に向かうことよりグループ間の関係性を良好に保ち、お互いが向上しあう協力体制やチーム力が期待できる。

ルーブリックを活用する効果として、学生の継続的な成長と改善点を教員がピンポイントで指摘でき、教員の教育技法の向上につながる（Stevens and Levi、2014）。実際には短時間に適切な評価を求められている中で、ルーブリックを活用することにより、速やかに的確な評価や指導ができると考えた。また、効果的に活用されているか、学生と評価を行う際に学生にフィードバックするなどの働きかけが重要である。さらに一緒に確認し合い、お互いが成長し合える関係性を保ち支援していくことが重要であると考えた。

Ⅴ．結語

看護学におけるルーブリックの作成過程と導入後の効果について、論文の分析を通して以下のことが明らかになった。

１．学生に達成してほしい目標や指導方針を具体的な内容で共有することによって、達成目標が明確になり、評価者間で評価の偏りが少なく、教員も学生も評価がしやすいルーブリックの作成ができる。

２．ルーブリックは課題や目標が端的に可視化できるという利点がある一方、具体的な評価の視点を伝えきれないという点もある。教員と学生の評価基準を一致させることが可能となるため、ルーブリックの導入後もデモンストレーションの継続が重要であることが示唆された。

３．学生にはルーブリックの活用目的や成果を詳しく説明し、評価の際は教員から学生にフィードバックするなどの働きかけが重要である。

研究助成情報

本研究は、令和 4 年度学校法人光星学院イノベーションプログラム(基金)の研究等補助金の助成を受けたものである。

文献

１）大学設置基準、第二十五条の二の２（2011）
https://elaws.e-gov.go.jp/document?lawid=331M50000080028　（参照 2023.１.31）

２）学校教育法施行規則、第百四十七条の一（2012）
https://elaws.e-gov.go.jp/document?lawid=322M40000080011（参照 2023.１.31）

３）石垣明子（2016）：大学におけるルーブリック評価の開発―医療人文科目における社会人基礎力を涵養するルーブリック－、つくば国際大学研究紀要、No.22、27-39.

４）沖裕貴（2014）：大学におけるルーブリック評価導入の実際－公平で客観的かつ厳格に成績

評価を目指してー、立命館高等教育研究、14 号、71-90.
５）厚生労働省、「専任教員養成講習会及び教務主任養成講習会ガイドライン」(2010) https://www.mhlw.go.jp/stf/shingi/2r98520000021c5z-att/2r98520000021d00.pdf (参照 2023. １.31)
６）厚生労働省、「看護教育の内容と方法に関する検討会報告書」について (2011) https://www.mhlw.go.jp/stf/shingi/2r9852000001316y.html (参照 2023. １.31)
７）細尾萌子 (2021)：ルーブリックの意義と活用のポイント　教員・指導者も学生も成長する評価へ、看護教育、62 (８)、692-701.
８）大井千鶴、諸田直美、今泉郷子、他 (2018)：成人看護論実習評価におけるルーブリック作成過程の実際、武蔵野大学看護学研究所紀要、12、49-55.
９）Dannelle D.Stevens and Antonia J.Levi (2014)、佐藤浩章 (2014)：大学教員のためのルーブリック評価入門、玉川大学出版部.
10) 山田貴代、高木静香、東野定律、他 (2017)：妊婦健康診査実習における助産学生に実習記録の評価の評価者間の一致度の検討～開発したルーブリックの有用性～、Journal of Wellness and Health Care、41 (１)、71-85.
11) 岸川公紀、梶田鈴子 (2019)：ルーブリックの作成方法と活用に関する一考察ー学生のアンケートを踏まえながらー、中村学園大学・中村学園大学短期大学部研究紀要、51、199-208.
12) 本田由美、脇坂豊美、山居輝美、他 (2020)：ICE ルーブリック評価票の活用と技術修得の実態ー「シーツ交換」の技術テストを通してー、甲南女子大学研究紀要Ⅱ、14、29-39.
13) 長峰伸治、成松美枝、高橋佐和子 (2018)：本学養護教諭過程履修学生のルーブリックに夜自己評価-ルーブリックの作成と実施について - 、聖隷クリストファー大学看護学部紀要、26、7-17.
14) 鈴木香苗、中信利恵子、松本由恵、他 (2018)：成人看護学実習における学生のルーブリックの活用状況、日本赤十字広島看護大学紀要、18、11-17.
15) 須藤聖子、林有学、小林智子、他 (2018)：看護基礎教育における e ポートフォリオ学修の実践報告 (第二報) ー基礎看護学におけるルーブリック評価の試みー、畿央大学紀要、15 (２)、75-81.
16) 鷲尾弘枝、宮崎誠 (2019)：看護基礎教育における e ポートフォリオ学修の実践報告 (第四報) ー母性看護学におけるルーブリック評価の試みー、畿央大学紀要、16 (１)、53-63.
17) 小林菜穂子、西山ゆかり、髙島留美 (2022)：基礎看護学実習Ⅰにおけるコミュニケーション能力育成に向けたルーブリックの使用による学習活動と学びの内容、聖泉看護学研究、11、11-21.
18) 作山美智子、傍島智子、安藤莉香、他 (2022)：在宅看護実習におけるルーブリック評価表を導入した教育効果の検討、東北文化学園大学看護学科紀要 11 (１)、29-42.
19) 為永義憲、蒔田寛子、山根友絵 (2021)：在宅看護実習におけるルーブリック評価表を導入した効果の検証、日本在宅看護学会誌、９ (２)、67-76.
20) 深山華織、岡本双美子、中村裕美子、他 (2018)：在宅看護学実習における学生のルーブリック自己評価表を用いた学習活動の効果、大阪府立大学看護学雑誌、24 (１)、49-56.
21) 近藤邦代 (2017)：母性看護学実習評価にルーブリックの導入を試みて、第 47 回日本看護学

会論文集看護教育.
22）古城幸子、木下香織（2013）：老年看護学実習の教育評価にルーブリック評価表を導入して、新見公立大学紀要、34、15-20.
23）甲賀純子、角典似子、小田初美（2016）：ルーブリックを統合実習に導入して～主体的学習への効果の検討～、京都第二赤十字病院医学雑誌、37、58-63.
24）前山直美、石川智子（2016）：プロジェクト学習とポートフォリオ評価を基盤としたルーブリックの導入効果、神奈川歯科大学短期大学部紀要、３、７-14.
25）森田敏子、上田伊沙子（2018）：看護教育に活かすルーブリック評価実践ガイド、メヂカルフレンド社.
26）糸賀暢子、元田貴子、西岡佳名恵（2017）：看護教育のためのパフォーマンス評価　ルーブリック作成からカリキュラム設定へ、医学書院.
27）寺嶋浩介、林朋美（2006）：ルーブリックの構築により自己評価を促す問題解決学習の開発、京都大学高等教育研究、12、63-71.

執筆者紹介（所属）
堺香奈子　八戸学院大学　健康医療学部看護学科　助教
前森桃子　八戸学院大学　健康医療学部看護学科　助教
坂本保子　八戸学院大学　健康医療学部看護学科　准教授
藤邉祐子　八戸学院大学　健康医療学部看護学科　講師

表１　研究対象文献

	タイトル	著者名	目的	結果
ルーブリック作成・開発	成人看護論実習評価におけるルーブリック作成過程の実際（2018）	大井千鶴、諸田直美、今泉郷子、他	学生が理解して活用できる成人看護論実習ルーブリック評価表の導入を目指した。	《評価尺度》に対する程度量を表す用語の不明瞭さがあった。教員は学生の傾向や実習の改善方法を検討しやすいこと、教員間の実習評価に関するコンセンサスを得ることができた。
	妊婦健康診査実習における助産学生に実習記録の評価の評価者間の一致度の検討～開発したルーブリックの有用性～（2017）	山田貴代、高木静香、東野定律、他	評価者間の評価の差異が少ない評価表の作成を目的とした。	実習記録から２つの養成校の評価者間の評価に差異がみられ、開発したルーブリックを用いた評価の方が差異は減少した。
	ルーブリックの作成方法と活用に関する一考察-学生のアンケートを踏まえながら -（2019）	岸川公紀、梶田鈴子	ルーブリックの作成手順と意義について考察を行った。	ルーブリックの作成では、①授業科目の振り返り、②学生の到達目標のリスト作り、③到達目標のリストのグループ化と見出し付け、④到達指針のチェック項目の検討、⑤ルーブリックの完成、といった手順で行われることを明らかにした。
ルーブリック活用の実際	ICEルーブリック評価票の活用と技術修得の実態－「シーツ交換」の技術テストを通して－（2020）	本田由美、脇坂豊美、山居輝美、他	「シーツ交換」の技術テストのプロセスにおけるICE- Rの活用と、技術修得の実態を明らかにする。	ICE- R評価票を用いた自己学習を行うことで、自己の実践を振り返ることが意識づけられた。
	本学養護教諭過程履修学生のルーブリックによる自己評価-ルーブリックの作成と実施について -（2018）	長峰伸治、成松美枝、高橋佐和子	養護教諭に必要な資質能力に関するルーブリック評価を作成・導入した。	教員が学生の学びの状況を把握し、教育活動を改善する上での、ルーブリックによる学生の自己評価及び面談の意義が示された。
	成人看護学実習における学生のルーブリックの活用状況（2018）	鈴木香苗、中信利恵子、松本由恵、他	成人看護学実習における学生のルーブリックの活用状況を明らかにし、効果的な活用への示唆を得る。	学生自身が目標達成のためにルーブリックから目標を設定し、目標達成に向けて行動したこと、行動から学んだことを一貫して記録することができていた。
	看護基礎教育におけるeポートフォリオ学修の実践報告（第二報）－基礎看護学におけるルーブリック評価の試み－（2018）	須藤聖子、林有学、小林智子、他	ルーブリック評価の試みについて、実践内容とその成果を報告する。	学生が自己の学修到達度を振り返りながら自己評価でき、学習成果を可視化することができた。
	看護基礎教育におけるeポートフォリオ学修の実践報告（第四報）－母性看護学におけるルーブリック評価の試み－（2019）	鷲尾弘枝、宮崎	母性看護学領域の講義・演習について、学生自らの探究心の向上、主体的に学ぶ姿勢を支援しつつ、効果的な教育方法、学習環境の方向性を明確化する。	講義・演習共にすべての教育内容項目について、自己の対応力が向上したという学生自身の実感が得られた結果、中間より最終評価の点数が高く、有意差があった。
ルーブリック導入後の効果	基礎看護学実習Ⅰにおけるコミュニケーション能力育成に向けたルーブリックの使用による学習活動と学びの内容（2022）	小林菜穂子、西山ゆかり、髙島留美	基礎看護学実習Ⅰのルーブリックを用いたことによる学生の学習活動や学びを明らかにする。	学生はルーブリックにより到達度を評価し、課題解決に向けた方法を模索しながら、能動的な深い学びにつながるような学習活動を展開していた。
	在宅看護実習におけるルーブリック評価表を導入した教育効果の検討（2022）	作山美智子、傍島智子、安藤莉香、他	在宅看護学実習におけるルーブリック評価表を導入した教育効果を検討する。	学びの到達度が視覚的な確認できたことによって学生・教員共に形成評価が可能になった。
	在宅看護実習におけるルーブリック評価表を導入した効果の検証（2021）	為永義憲、蒔田寛子、山根友絵	在宅看護学実習にルーブリック評価表を導入した効果と実習方法やルーブリック評価表の改善の示唆を得る。	教員は学生の傾向や実習の改善方法を検討しやすいこと、教員間の実習評価に関するコンセンサスを得ることができた。
	在宅看護学実習における学生のルーブリック自己評価表を用いた学習活動の効果（2018）	深山華織、岡本双美子、中村裕美子、他	在宅看護学実習において、学生のルーブリック自己評価を用いた学習活動の効果を明らかにする。	学生は、自己評価表を活用することで、グループメンバーとともに学ぶ姿勢を持つことができ、学習活動が高まった。
	母性看護学実習評価にルーブリックの導入を試みて（2017）	近藤邦代	母性看護学実習の評価にルーブリックの導入を試み、評価ツールの効果について検討した。	ルーブリックに変換することの困難さを解消するためには、ルーブリックを活用し継続して実践していく。
	老年看護学実習の教育評価にルーブリック評価表を導入して（2013）	古城幸子、木下香織	老年看護学自習のルーブリック評価導入の成果を明らかにすることを目的とする。	高齢者の老化の過程や生活者の理解についての到達度が高く、実習プロセスの中で繰り返し目標への振り返りが可能となった。
	ルーブリックを統合実習に導入して～主体的学習への効果の検討～（2016）	甲賀純子、角典似子、小田初美	ルーブリックを導入することで具体的な到達点の確認と自らの課題を把握しながら実習に取り組むことができたか分析する。	ルーブリックを活用したことにより、学生は統合実習で付ける力が明確となり、自らの課題を意識して主体的に学習し、実習に取り組むことができた。
	プロジェクト学習とポートフォリオ評価を基盤としたルーブリックの導入効果（2016）	前山直美、石川智子	プロジェクト学習とポートフォリオ評価、ルーブリック導入の効果と課題を明らかにすることを目的とした。	主体的に学修する習慣や動機づけの刺激、学生の形成的評価に活用でき、到達目標の達成を果たすことができた。